



第7章 アクティビティの紹介

木育プログラムとして、参加者にどのような体験をしてもらうか。この体験の内容が「アクティビティ」です。

ここでは、木育へとつなげるためのアクティビティを紹介しています。

1 アクティビティ事例 木のプールで 遊ぼう

対象年齢	1才～
作業時間	30分
対象人数	特になし
フィールド	室内

木のプールに入って遊ぶことで、木の玉に触れ、遊びながら木の質感を感じさせます。

ねらい

木のプールに入って、木の玉に触れながら遊ぶことで、木の質感を感じさせます。

準備するもの

- ・いろいろな樹種からなる木の玉が入った木のプール

進行上のポイント

自由に遊ぶ中で、必要に応じ声をかけたり、ともに楽しんだりすることで、「木の楽しさ」を実感したり、「新たな気付き」が生まれるように配慮します。混雑してきた場合は、危険を回避するため、一度に入る人数を制限する必要があります。

注意事項

乳幼児の場合は、誤って飲み込まないよう小さな玉を口に入れさせないための注意が必要です。必ず大人が側に付き、玉を投げるなど不適切な遊び方をする子どもには、他の遊び方を教えてあげたり、枠から出てしまった玉で他の子どもが転倒するのを防ぐなど、危険のないように見守る必要があります。



2 アクティビティ事例 木のマグネットを 作ろう！

対象年齢	3才～
作業時間	30分
対象人数	特になし
フィールド	室内

樹種の違う2個の木片に紙やすりをかけ、マグネットシートを貼り、木のマグネットを作ります。クルミの実を使ってオイル仕上げし、「木育のエッセンス」を伝えます。

ねらい

木片を紙やすり加工することにより、木の種類によって、硬さ・香り・触感・色や木目が違うことを五感で感じながら、手づくりをする楽しさを実感します。

心をこめた丁寧な作業を通して、自分で作ったものを大切に使うことの意味に気付かせます。

気軽に始められる木工のスタート・ラインです。

準備するもの

- ・同じ大きさの2個の木片素材（例：3×3×厚さ1cm）
（できれば地元産の代表的な針葉樹と広葉樹）
- ・粘着剤付マグネットシート
- ・紙やすり（中目180番と細目400番の2種類）
- ・クルミの実、木綿布、輪ゴム
- ・カッティングマット、新聞紙等（作業機の養生用）
- ・ごみ袋

進行上のポイント

自分の手でモノを作る楽しさや体験に基づく学びを感じられるように、対象者の進行状況に合わせて作業を進めます。作業前後及び作業中を通して、森林と木材のつながり、木の特性や加工性、木と人とのつきあい方など、「木育のエッセンス」となる説明や語りかけに配慮します。

注意事項

紙やすり作業の削りカスは、研磨剤と木の粉が混ざったものなので、ホコリをたてたり、吸い込まないように注意します。場合によっては、マスクを着用します。

手順

- ① 「木のマグネット」のねらい（導入説明）。
- ② 作業手順の説明。
- ③ 素材配布（木片、紙やすり）。
- ④ 紙やすり加工→マグネットシート貼りつけ。
- ⑤ クルミの実をつぶし、にじみ出たオイルでみがく。
- ⑥ 感想、ふりかえり、メッセージ。



3 アクティビティ事例 木の保育園を 作ろう

対象年齢	幼児
作業時間	2時間程度
対象人数	園場により、何人でも
フィールド ¹⁾	圃場、園庭など

幼児に森から種を拾ってきてもらい、その種を苗床に植えてお世話し、3年後に森へ返しに行きます。

ねらい

木というものが、種から育ち、育つには時間がかかるということを感じてもらいます。自分の分身のような木を森に返すことで、森に対する愛着が沸きます。

準備するもの

- ・木の枠、またはプランター（魚などを入れる発泡スチロールの箱でも可）
- ・腐葉土（市販のもので可）
- ・郷土樹の種（当日拾っても良いし、先に用意しても良い）
- ・表示板
- ・シャベル

進行上のポイント

北海道造園緑化建設業協会や森づくりセンターなど、種子や苗木づくりに詳しい人に協力をお願いし、指導を受けることで、保育と森づくり、土木関係者と新たなつながりをつくります。

種を植えるだけのイベントとしてではなく、それを育て、森に帰すまでのスケジュールを組みプログラム化していきます。

注意事項

種が虫に食べられていないか、腐ったりしていないかチェックしておくこと。種によっては、すぐに芽の出ないものもあります。

大きな種（ドングリなど）は、動物や鳥に食べられないように工夫が必要です。

手順

- ① 種についての興味付け（絵本などを読む）。
- ② 公園や森に出かけ、種を拾う。
- ③ 「種のおじさん・博士」から、種の不思議や植え方について教えてもらう。
- ④ 種を選ぶ。
（その後）
- ⑤ 次の年は、草抜きや水やりなどの保育作業。枯れてしまったら補植をする。
- ⑥ 最後は、森に植樹。



4 アクティビティ事例 絵本の 読み聞かせ

対象年齢	幼児～ 小学校低学年
作業時間	5～15分程度
対象人数	1人～20人程度
フィールド ¹⁾	森林など

森などの自然の中で、子どもたちのお気に入りの絵本を読み聞かせます。

ねらい

森の温度や湿度、音や匂いなど、五感を働かせながらお話を聞くことによって、内容を想像力豊かに、かつ体感的に理解するなど、豊かな感性が育まれることを期待。

進行上のポイント

- 1) 森の中で行う時は、なるべく広くて開放的に感じる場所で行うこと。木がうっそうと茂っているような閉鎖的な空間では、子どもたちが恐さを感じてしまうので、そのような場所は避ける。
- 2) 子どもたちは、座らせて読み聞かせる。立ちっぱなしでは集中が持続しない。
- 3) 読み聞かせる時間は、長くても15分以内。それ以上だと集中が持続しない。
- 4) 読み聞かせる絵本は、子どもたちのお気に入りのものでかまわないが、森の動物たちが登場するものや森にまつわる物語だと、より効果的。

注意事項

ハチやウルシなど、付近に危険がないことを十分確認してから行いましょう。

手順

- ① 森の中の適当な場所に座らせる。
- ② 子どもたちのお気に入りの絵本を読み聞かせる。
- ③ 子どもたちに感想を話させるなど、読み聞かせ体験が記憶に残るよう印象付けを行う。



【絵本の例】

- ① 「木のうた」作：イエラ・マリ（ほるぷ出版）
- ② 「木はいいなあ」作：ジャンス・メイ・ユードロイ、
絵：マーク・シーモント、訳：西園寺祥子（偕成社）
- ③ 「おぼえているよ おおきな木」作：佐野洋子（講談社）
- ④ 「みずならのいのち」作：手島圭三郎（リブリオ出版）
など

5 アクティビティ事例 葉っぱ コンテスト

対象年齢	幼児～大人
作業時間	30～1時間
対象人数	何人でも
フィールド ^①	森林

「大きい葉っぱ」などといったお題に合わせ、そのお題になった葉っぱを探してきて、参加者同士で競い合います。

ねらい

楽しみながら、いろいろな葉を探し、ふれあうことで、探す楽しさを知り、木や森に対する興味を促します。また、葉の形状などの多様性を知ること、北海道の森林の樹種の多さに気づき、森林の豊かさを知ります。

進行上のポイント

なるべく樹種が多い場所を選んでおきます。

北海道の森は針広混交林で樹種が多いことが特徴なので、そういったことを知るきっかけになるように進行します。また、小学校の高学年以上であれば、「羽状複葉^{うじょうふくよう}」など、葉の形状についても触れてみましょう。

お題の出し方の順序は、答えがはっきりとしているもの（例：「一番大きな葉っぱ」など）から、はっきりしていないもの（正解の無いもの。例：「ステキな葉っぱ」など）へと展開していくのが良いです。

注意事項

「落ち葉でない葉の採取は1枚まで」など、環境にも配慮する必要があります。

手順

- ① リーダーがお題を出し、制限時間を設けて探しに行く。
- ② みんなが持ち寄った葉を見比べ、優勝者を決める。
- ③ お題を変えて、何回か繰り返す。
- ④ 持ち寄った葉を使つての「コラージュ」や紅葉の時期であれば「グラデーション」など、造形遊びにも展開できます。また、図鑑を使つての調べ学習もできます。



6 アクティビティ事例 木育の玉手箱

対象年齢	小学生～
作業時間	30～45分
対象人数	10～40人
フィールド ^①	室内

KEM工房のオリジナル教材「木育の玉手箱」を使って、木の様々な特性を体感的に学びます。

ねらい

北海道産の代表的な樹種の特徴や木の特性を体感的に学びます。



（セット内容）

- ◇テキスト：「木育の玉手箱」専用
- ◇5種類の板：針葉樹のイチイ、エゾマツ 広葉樹のナラ、セン、サクラ
- ◇輪切り材：サクラとイチイ（木目と成長の違い）
- ◇10倍ルーペ（広葉樹と針葉樹の木材組織の違い）
- ◇音のカタカタ：ミズナラとエゾマツ（音の違い）
- ◇松カサとクルミ（広葉樹と針葉樹の種子の違い）

準備するもの

- ・木育の玉手箱：一人1セット、または二人で1セット（参加者はテキストのみ持ち帰り、教材は反復使用）（セット教材のうち一部をアレンジして実施可）
- ・机と椅子

進行上のポイント

机の配置は、参加者同士のコミュニケーションが図れるように、グループ単位や向い合わせにする。それぞれの参加者が五感を使ってゆっくりと実感できるように、全体の雰囲気と流れを考慮して進めます。

注意事項

教材の配布から回収まで、リラックスして、落ち着いた雰囲気体験できるよう、あらかじめ動線を配慮して会場設営をします。

手順

教材の配布（木育への興味と期待感を大切に！）

→「木育の玉手箱」の説明（導入）

→テキストに沿って体感

→「では、玉手箱を開けてみましょう！」

- ① 木のさわり心地
- ② 木の音
- ③ 木のつくり
- ④ 木の成長
- ⑤ 木の種「木はスゴイ！木はステキ！」
- ⑥ 「身近な木と仲良しになろう！」
- ⑦ 感想、ふりかえり、メッセージ

7
アクティビティ事例
007
この木を探せ

対象年齢	小学生以上
作業時間	1時間
対象人数	何人でも
フィールド	森林

参加者が考えたヒントを頼りに、別の参加者が感覚をフルに駆使してある木を探し出します。

ねらい

木を探しながら感覚を養い、参加者同士のコミュニケーションを促します。

木をよく観察し、ふれあうことで木に興味を持ってもらい、木を見るためのポイントを知ってもらいます。

準備するもの

- ・ヒントを書くワークシート
(見た目は？ 匂い？ 手触り？ 叩くとこんな音？ 周辺の様子？ 何かに例えると？ スペシャル？ など、7つのヒントが書き込めるシート)
- ・筆記用具
- ・ヒントを入れる袋

進行上のポイント

ヒントは感覚と使えるようなものにします。参加者によっては、木全体ではなく、「幹」「葉」といった部位に限定しても良いでしょう。参加者同士の交流が進むように楽しい雰囲気で行います。

注意事項

木の幹などを触ることになるので、ツタウルシなど触るとアレルギーの出るようなものは、事前にレクチャーしておく必要があります。

手順

- ① 参加者に、自分が気になる木を選んでもらう。
- ② ワークシートに、その木を当ててもらえるようヒントを書き込む。
- ③ ヒントが書かれたワークシートを紙に入れ、くじを引くように別の参加者に引いてもらう。
- ④ ワークシートに書かれたヒントを手掛りに、その木を探す。
- ⑤ 答え合わせや感想などを話し合う。



8
アクティビティ事例
木製バットの年輪を数えよう

対象年齢	小学校 中学年
作業時間	30～60分
対象人数	準備ができる人数
フィールド	室内

木製バットの年輪数、年輪幅を測定し、バットに適した樹種や林齢、資源背景などについて学びます。

ねらい

スポーツ用具という身近な素材を通じて、木の成長過程、年輪の形成、材質について学びます。北海道がバット材生産の好適地であることを知るとともに、木材資源を維持することの重要性を認識し、植樹活動などへの関心を喚起することがねらいです。

準備するもの

- ・木製バット：一人1本（木口の年輪が見えやすいものを選ぶ。アオダモやメープルなど、樹種の異なるバットがあると良い）
- ・定規：一人1つ（年輪幅が測定できるもの）
- ・ルーペ（もしくは虫めがね）

進行上のポイント

最初に、年輪形成の仕組みと断面によって、どのような年輪が現れるかなど、基礎知識の説明が必要です。

手順

- ① 年輪について説明します。芯が最も古く、樹皮に近い部分ほど新しい。季節がはっきりしている日本では、一年ごとに年輪が作られるため、年輪を数えることでその木の年齢がわかります。
- ② 木製バットのおよその年輪を数えてみます。バットは芯去り材を用いるため、長い年月を要することを実感できます。
- ③ 年輪幅を数えます。アオダモなどの環孔材は、年輪幅が広いほど強度が大きいという性質があります。
- ④ プロ野球選手の使うバットを調べてみます。イチロー選手はアオダモ、松井秀喜選手はメープル（北米産カエデ）。
- ⑤ 北海道のアオダモ資源について、バット材に適した材が少なくなっていることから、植樹活動などが行われていることを紹介します。



9
アクティビティ事例
音で比べる
樹種の違い

対象年齢	小学校高学年～
作業時間	60分程度
対象人数	目が届く人数で
フィールド	室内

木琴は、木片の長さや厚さを変えることで音階をつくれますが、音の高さには、密度や強度なども関係しています。木琴を製作し、音の性質や樹種の違いなどを学びます。

ねらい

木琴の製作を通じて、ものづくりの楽しさを体感するとともに、音に関係する様々な要因について学びます。また、北海道が楽器材の生産地であることを伝えます。

準備するもの

- ・木琴の音板：同じ寸法の木片で多数の樹種を用意（＝鍵盤）
- ・横木：音板を固定するもの
- ・合板：音板と横木をつなぎとめる台として
- ・ハンドドリル、木ネジ、木琴用パチ

進行上のポイント

音階に影響する要因について説明します。

- ・長さが短いほど、音は高くなります。
- ・厚さが厚いほど、音は高くなります。
- ・密度が大きいほど・・・とはいきません。

密度と強度（ヤング係数）の比が影響します。また、節などの有無でも音が変わります。樹種によって密度や強度が異なることから、同じ寸法でも音階が変わることを説明し、工作に入ります。

注意事項

樹種の違いだけでは、オクターブの音階を作成することはできません。通常の木琴とは異なることを説明します。

手順

- ① 楽器に用いられる樹種について説明し、北海道が優れた楽器材の産地であることを紹介します。
- ② 音階に影響する要因と扱う樹種について説明します。
- ③ 同じ寸法で樹種の異なる板を叩き、音の高低を調べます。
- ④ 音板の二カ所にドリルで先穴を空け、台と横木を接続します。音板を完全に固定してしまうと音が響かなくなります。横木に布を貼る、ドリルで先穴を空け、木ねじの締め方に余裕を持たせるなどの工夫をします。



10
アクティビティ事例
森や木に関わる
仕事人の話を
聞き書き

対象年齢	中学生～大学生
作業時間	3時間～数日
対象人数	何人でも
フィールド	仕事人の仕事場

地元の森や木と関わって仕事をしている人（森林組合員、炭焼き職人、製材業者、木工作家など）を訪ね、仕事内容や木の魅力について話を聞き文章にまとめます。

ねらい

森林や木と接しながら仕事をしてきた人から直接話を聞き文章にまとめることによって、林業の現状や苦労など森や木に関することへの理解を深めます。長年の経験から実感した木の魅力や森の大切さが学生たちに伝わることを期待。

年配の人と接することによって、コミュニケーション能力も身につけていきます。

進行上のポイント

- 1) 事前に聞き書き対象者候補に企画の趣旨を説明し、協力の承諾を得ておくこと。
- 2) 話を聞くポイント、文章にまとめる際のヒントなどは、話を聞きに行く前にレクチャーしておくこと。
- 3) 進め方は大きく二通り
 - ① 一人の聞き書き対象者に対して数人で訪問してのグループインタビュー。
 - ② 一人の聞き書き対象者に対して一人で訪問して、一対一のインタビュー。

手順

- ① 聞き書き対象者候補のリストアップし協力の依頼。
- ② 聞き書きについての学生向け事前研修。
- ③ 学生が訪問先へのアポ取り、訪問、インタビュー、文章化。
- ④ まとめた文章の発表会実施。意見交換を行う。
- ⑤ 聞き書き対象者の方へのお礼と聞き書き文を届ける。



11

アクティビティ事例

木と音楽を感じよう!

対象年齢	大人
作業時間	2~3時間
対象人数	5~10人
フィールド	家具工場

自分で作った椅子に座ってクラシック音楽を聴くことで、木の感触と音楽との相乗効果で五感を刺激し、ものづくりから得られる楽しさや喜びを一層高めさせます。

ねらい

木に触れながら、実際に加工することにより、木の質感・硬さ・重さなどをリアルに感じ、椅子が完成する過程を知り、その大変さや楽しさ、喜びを感じます。そして、苦勞して完成した椅子に座り、クラシック音楽を聴くことで、心の底から満たされた喜びを感じることができます。

準備するもの

- ・ある程度まで加工を進めた椅子のパーツ
(座面、脚4本、貫3本)
- ・木工機械一式
- ・サンドペーパー
- ・オイル
- ・ウエス
- ・ボンドなど

進行上のポイント

いろいろな樹種の木材を用意して、体験者に好みのものを選んでもらいます。そのことにより、製作する椅子により愛着が湧くし、他の人と樹種の違いなどによる堅さや色などについて会話が広がります。

聴く音楽は、クラシックでなくてはならないわけではありませんが、情感を高める効果を考えると、クラシック音楽が好ましいでしょう。

注意事項

木工機械はとて危険なため、熟練者がそばに付いて作業しましょう。体験者が恐さを感じる場合は、熟練者が作業するようにしてください。

手順

- ① 座面の形を帯ノコで切り抜く。
- ② 切り抜いた座面をルーターで丸面加工。
- ③ ②で加工した座面をサンドペーパーで仕上げる。
- ④ 椅子の組立て。
- ⑤ オイル塗装して完成。
- ⑥ 完成した椅子に座ってクラシック音楽を聴く。

12

アクティビティ事例

木の床を考えよう

対象年齢	大人
作業時間	2時間程度
対象人数	20人
フィールド	森が近い室内

自分の家や学校、公民館、保育園など、身近な施設の床を「木の床」に変えたとしたら、どんな木を使って、どんなデザインが良いかをディスカッションします。

ねらい

木材の特徴を理解しつつ、森を感じられる床をつくる過程を通して、自分の生活や育環境と木の関わりを考えます。

準備するもの

- ・フローリング材の見本 数種類
- ・マジック
- ・模造紙

進行上のポイント

木に触れ、その違いを感じられるようにします。参加者自身が、自由な発想で新たな木との暮らしを創造できるように、いろいろな視点を提供します。

手順

- ① 森に行き、それぞれの木の様子や特徴を観察する。
- ② 数種類のフローリング材を観察して(触り比べなど)、その特徴(硬さ、柔らかさ、色味)を感じる。
- ③ 木材を使ったリフォームに詳しい人から、レクチャーを受ける。
- ④ 木を使って、床をリフォームすると仮定し、用途や目的、耐久性、質感、教育的効果などを考え、どの木材をどのようにデザインするか、どのような施工をするかを話し、施工計画を立てる。
- ⑤ でき上がった施工計画を環境、教育的効果といった点で、評価し合う。



13

アクティビティ事例

私と木の 自己紹介

対象年齢	誰でも
作業時間	一人1〜3分
対象人数	何人でも
フィールド	どこでも

参加者それぞれが、木や森への思いが詰まった物を持ち寄り、その思いについて自己紹介とともに発表し合います。

ねらい

大切な「木」が、生活や人生の中にちりばめられていることや木に対する多様な価値観があることを知り、木に対するイメージを広げます。

準備するもの

- ・各人が大切にしている「木」、木製品、木にまつわるものなどを持って来てもらう。
- (例)
- ・朝食時に愛用しているエゾマツ製のパン皿
- ・小学校の卒業式の日木造校舎の前で撮影した記念写真
- ・森の中で拾った形の違う松ぼっくり

進行上のポイント

木育プログラムの導入（アイスブレイキング）として使うと良いでしょう。各人の多様な価値を尊重し、肯定的な雰囲気をつくります。

手順

- ① 参加者に木にまつわるものを持ってきてもらう。
- ② それにまつわるエピソードを紹介してもらう。
- ③ それぞれの人が持ってきたものを並べる。
- ④ それを見ながら、感想を出し合う。



14

アクティビティ事例

木のスプーンで アイスクリームを 食べよう

対象年齢	誰でも
作業時間	15〜30分
対象人数	何人でも
フィールド	室内

木のスプーンとステンレスなどのスプーンなどで、アイスクリームを食べ比べます。

ねらい

木と他の素材の違いを、アイスクリームを食べることで感じてもらいます。また、木育と食育とのつながりを考えるきっかけにしてもらいます。

準備するもの

- ・アイスクリーム
- ・木のスプーン
- ・ステンレスのスプーン
- ・その他の素材のスプーン

進行上のポイント

プログラムとプログラムの合間のブレイクタイムに実施すると有効です。

食と木の器についてなど話題を広げ、食育との接点を見出し、木と食についても考えてもらいます。

手順

- ① 木と他のスプーンでアイスクリームを食べ比べし、その違いを話し合う。
- ② 時間があれば、木のスプーンづくりやアイスクリームづくりから始めると、一つのプログラムとなる。



第 8 章 木育プログラムの紹介

前章で紹介したアクティビティが「部品」なら、それを組み立てたものが「プログラム」です。

ここでは、実際に道内で実施されたプログラムの事例を紹介します。

対象者、場所、人数、時間など、限られた条件の中で、効果的に木育を伝えるための参考としてください。



対象者	年齢問わず"
日程	1～2日
参加人数	1日100名程度
場所	商業施設など

各地域の商業施設において、木製遊具とふれあうスペース（木育ひろば）の提供と木育木工教室を実施している。

□ねらい

木製遊具とふれあうことで北海道の木材の良さを実感、木工を通して木製品を使用することの良さを体感してもらうことで、その地域の人々に「木育との出会い」「木のある生活」という価値を伝え、地域における木育活動の促進を図る。

□準備するもの

- ・木製遊具（きぼうのプールやスギックモックなど）
- ・木工に使用する道具や材料（マイ箸づくりであれば、治具と鉋、箸材など）

□プログラムの構成

- ・木製遊具に自分の手でふれ、木の色や音、におい、温かみを知ってもらい、遊びを通して木育を体感してもらう。
- ・木育のお話として、材料の説明（使用する材の名前や特徴など）をするなど、地域材を使った木製品への愛着や関心を持たせる。
- ・自ら作り上げた木工をお持ち帰りいただく。

□プログラムの進行



- ・木製遊具で遊ばせる。



- ・木育木工教室の開催。
- ・木育のお話。



- ・木工の実施。



- ・自分の作品をお持ち帰り。



□参加者の声

木とふれあうことで、「木の良さを体感できた」、「今まで知らなかった木のことをいっぱい知ることができた」、「木を身近に感じるきっかけになった」などの感想があった。

□注意すべき点

木製遊具の安全対策、作業際の安全管理など、プログラムを進める側の意識向上が必要である。

対象者	緑の少年団ほか
日程	1泊2日
参加人数	26名(引率含む)
場所	大樹町

緑の少年団をはじめとする子どもたちが、森や木とふれあう機会を通じて交流や連携を深めるプログラムとして実施する。

□ねらい

森や木とふれあう機会を通じて交流や連携を深め、「人と、木や森とのかかわりを主体的に考えられる豊かな心」を育み、併せて緑の少年団の指導者等のスキルアップを図る。

□準備するもの

- ・木工や散策、様々な体験ができるフィールド
- ・森や木、ものづくりに詳しい人（木育マイスター）
- ・遊具、木工の道具、各体験で使用する道具

□プログラムの構成

「木にふれる（木と遊ぶ）」、「木を育てる（森のお仕事）」、「木を使う（ものづくり）」など、その地域ならではの体験を組み合わせるプログラムとする。

□プログラムの進行



- ・木工 「きぼう」づくり（「希望」を「きぼう」でプロジェクトへの参加）
- ・木工 「木の名札」づくり ※木育マイスターによる指導



- ・森林散策 風倒木の処理をして遊び場づくり
枝払い、除伐体験、森あそび
- ・薪割り体験、火おこし体験
自分たちで伐ってきた木を使って薪割りをし、薪を使って火おこしまでを体験する。



- ・バイオマスボイラー見学（地元のカラマツチップを使用）
地元の温泉がどのように温められているのか、実際に目で見て体験する。



- ・砂金堀体験
地元ならではの体験。

□参加者の声

「普段経験できないような体験ができてよかった」、緑の少年団の引率者から、「来年もぜひ継続してほしい」などの感想があった。

□注意すべき点

体験に応じた服装など、各自で安全管理をさせることも大事。自ら興味をもったことに、積極的に取り組めるように仕組む。

対象者	小学校1～6年生
日程	2日間
参加人数	生徒11名、教員4名
場所	弟子屈町、津別町

小学生を対象として「森と身近にある木の道具のつながりを考え、体感する」ことをテーマに、木育授業を実施した。

最近では、小学生に限らず、中学生、高校生向けにも木育授業（将来の担い手を見据えた取組）を展開している。

□ねらい

森林にある樹木と生活に必要な木材はつながっており、昔から、人はそのことを知った上で、森林を保ちながら木材を得るといった密接な関係を築いてきた。このことを小学生に考え体感してもらおうのがねらい。

□準備するもの

- ・10数種類の木材見本
- ・道産木材を素材とした木の道具（バット、皿、スプーンなど）
- ・クイズ問題用紙

□プログラムの構成

1日目：学校でイントロダクションの講義やクイズ（木の種類、木によって重さや木目が違う、身近な道具に道産木材が使われているなど）、森を歩きながら自然観察（人工林と天然林の違い、針葉樹と広葉樹の違いなど）

2日目：木材工場見学、木工作体験

□プログラムの進行

コーディネーターが全体の企画をプランニングし、各アクティビティにふさわしい場所や見学先を選定。企画趣旨を説明し協力を求める。協力先の理解を得た後、各担当者と当日の流れやポイントなどを検討しておく。

I 木や木の道具についての講義とクイズ（説明者：コーディネーター）

- ・10数種類の木材見本を用意。子どもたちに持ってもらって、感触や重さ、木目の違いを体感してもらう。
- ・身近な道具が何の木から作られているかをクイズ形式で学んでいく（例：アオダモ→バット）。

II 森を歩く（説明者：自然ガイド、コーディネーター）

- ・森を歩きながら、森の様子や木々を観察。人工林と天然林の違いなどを知る。
- ・学校で見せた道具に使われている木を、森の中で確認（例：アカエゾマツ→ピアノの響板）する。

III 木材工場見学（説明者：工場長、コーディネーター）

- ・トドマツ丸太が、皮むきから始まって角材になっていくまでの製材の様子を見学。
- ・エゾマツが薄く削られて経木に加工され、折り詰め弁当箱や生キャラメルなどの容器に形を変えていく工程を見学。

IV 木工作体験（工作指導：木工体験工房の指導員）

- ・糸ノコなどでセン材を加工し、木工作品を作る。

□参加者の声

「種類によって木の重さや音が違うのでびっくりした。キハダの木が胃腸薬になるなんてすごい！」「木は人間にとって、とても大切なものだなと改めて気付きました。木を大切にしたいです」などの感想文を小学生たちが書き、協力先やコーディネーターへ教員のお礼状を添えて送った。

□注意すべき点

リスクマネジメント対応を事前に確認。森歩きの際の装備、木材工場見学時の行動（稼働中の大型機械に近づかないなど）や木工作体験での安全確認などを参加者に徹底しておく。

対象者	年齢を問わず
日程	延べ50日
参加人数	延べ200人
場所	登別市

平成18年6月から12月にかけて登別市鉱山町にある「登別市ネイチャーセンターふおれすと鉱山」において、NPO法人登別自然活動支援組織「モモンガくらぶ」が、地域の方々と一緒に、間伐材を使ったログハウス「森のおうち」を作った。現在は、「木育センターハウス」として様々な用途で活用されている。

□ねらい

自分たちが手がけた材で、ログハウスを作り上げる。それと同時に、地域の材を使うことで、CO₂固定にも貢献していく。この暮らしにつながる「ものづくり」を通して、先人たちの知恵・技を伝授する場を生み出し、子どもから大人まで幅広い世代が関わって一緒に作り上げる場を創出した。また、関わった地域の皆さんの間に交流も生まれ、新たな居場所の創出、そして新たなコミュニティ作りをねらいとした。

□準備するもの

- ・ナタ、ノコギリなどの大工道具一式
- ・チェーンソー、ヘルメット
- ・救急セット
- ・その他必要なもの



□プログラムの構成

森から木を間伐し、皮をむき、材に仕立てる。その後、その材を使って、ログハウスを作り上げていった。

また、この活動をきっかけに「森のトンカチチーム」というボランティアの皆さんが集まったチームを作り、週末には、施設の補修、新たなログハウスの建築など、様々な活動が行われている。

□プログラムの進行



5月：「木を伐る」

昔学校だった「ふおれすと鉱山」。グラウンドには35年前に子どもたちが植えたトドマツ林がある。このトドマツ林の手入れとして、トドマツを間伐した。



5月：「木の皮をむいて材に仕立てる」

昔ながらの道具を使って、間伐したトドマツの皮むきをした。子どもから大人まで幅広い世代の皆さんが関われる作業だった。この材が実際にお家になっていくというイメージも手伝い、一生懸命、取り組んでいた。



6月～12月：「材を使って、ログハウスを作る」

ログハウスを建設したことのある方が棟梁となり、その技が伝授され、ログハウスが組み上がっていった。設計図を描き、土台を作り、チェーンソーで木を加工し、防腐剤を塗り、丸太を組み上げていく。そこで生まれた連帯感、達成感、コミュニティ作りに欠かせないもの。

□参加者の声

参加した皆さんから、「自分たちでおうちができるなんてすごい！」「楽しかった！」「大きくなったら大工さんになりたい」「またここに来て、この仲間達に会いたい」「もっと作りたい」などの感想があった。

□注意すべき点

木材を扱うため、安全管理を徹底し、プログラムを進める上で技術者、指導者が必要。

対象者	大人
日程	2泊3日
参加人数	15人
場所	旭川、富良野

森と木と暮らしのデザインを体験することをテーマに、首都圏在住の建築士、インテリアコーディネーター、家具デザイナー、北欧家具愛用者などを対象として、旭川・富良野地域の森林、木材加工施設、そして実際に活用されている木製家具の見学を組み合わせたツアーを実施した。

□ねらい

建築士やデザイナーなどに、木工家具の価値を川上から川下までの流れ（森林、製材、デザイン、加工、製品、使う）の中で実感してもらおう。さらに、旭川周辺で家具産業が発達してきた背景を理解してもらい、北海道で生産された木製家具の普及につなげる。

□プログラムの構成

- 1日目：旭川空港→東大富良野演習林→ドイツ人デザイナーのペーター・マリー氏講演会
- 2日目：製材所見学→東海大学・織田教授宅訪問→旭川銘木市の土場見学→家具メーカーの工場見学
- 3日目：旭川家具木工祭見学→木工家具作家と木工クラフト作家の工房を見学→旭川空港

□プログラムの進行

- ・移動は貸切バスを利用。コーディネーターが全体の流れを説明。各見学場所へ行く前にポイントをレクチャー。
- ・見学場所では、その担当者から説明や案内をしてもらう。
- ・見学後、移動のバス車内で、コーディネーターが見学内容のフォローや参加者からの質問を受ける。



森の中を歩いて森林への理解を深める

- ・東大富良野演習林：教官からレクチャーを受けた後に演習林の中を散策。



木材製材と販売の様子を見学

- ・製材所見学：道産ミズナラが製材される様子を見学。
- ・旭川銘木市の土場見学：道産広葉樹の丸太が売買される様子を見学。



木製家具のデザインと製作

- ・ドイツ人デザイナーのペーター・マリー氏講演会：家具デザインについての話を聞く。
- ・家具メーカーの工場見学：家具製作現場や旭川家具木工祭会場の家具展示を見学。
- ・木工家具作家と木工クラフト作家の工房を見学。



木製家具を使っているシーンを体感する

- ・東海大学・織田教授（現、名誉教授）宅訪問：名作椅子のコレクターで研究者である織田教授より、椅子に関するレクチャーや家具を使う立場のお話を、名作椅子（ウェグナーやフィン・ユール作品など）に座って聞く。



製材所で木取りの仕方の説明を聞く参加者

□参加者の声

「日頃は製材された木しか見ていないが、実際に木が生えている森から順番に製材、加工、使うシーンを見学できて、大変勉強になった」「旭川で家具産業が発達してきた理由が良くわかった。豊かな自然環境と木材加工技術を持つ人などのつながりがあってこそだと思った」

□注意すべき点

建築家などプロ対象の企画なので、事前に専門的な観点のニーズを参加者からヒアリングしておくことも必要。

対象者	大人
日程	年間(月1回)
参加人数	各回約20名
場所	滝川市

平成 17～19 年度、空知森づくりセンターが滝川市老人ホーム緑樹園と連携し、道有林を活用した森林浴事業を実施した。対象者は老人ホームに入居する高齢者及び職員で、一回の事業時間は1～1.5時間、月に一度のペースで行った。

老人ホームの職員にノウハウを提供したことで、現在は緑樹園が主体的に森林活用を行い、センターがサポートする形となっている。

□ねらい

滝川市の道有林「交流の森」の遊歩道は、ウッドチップ舗装により車イスの通行が可能。隣接地に老人ホームがあることから、高齢者の憩いの場として活用、森林浴による引きこもりなどの予防、地域社会への参加促進をねらいとした。

□準備するもの

- ・木の葉、花、実などクラフトに用いる材料
- ・稚貝（キーホルダー）、牛乳パック（しおり、ハガキ）
- ・樹木図鑑、きのこ菌、丸太

□プログラムの構成

室内ではものづくりの楽しさや達成感、指先などの機能維持を期待して、押し花を用いたキーホルダー、牛乳パックのしおり、ハガキ、ミニ門松、ツリーづくりなどを、森林内では森の癒し効果を期待して、野鳥や草花の観察、きのこの植菌体験などを実施した。

□プログラムの進行

事前に施設との連絡調整を済ませ、実働部隊（森林セラピー支援隊）が結成された。



春：下層植物の観察やきのこの植菌体験



夏：広葉樹の葉の違いなど観察



秋：越冬の準備をする森林の散策、きのこや木の実採取



冬：地域の素材を使ったクラフトづくり
プログラムの検証と次年度への展開



森の素材を使ったクラフトづくりの様子



作成されたミニ門松とミニツリー

□参加者の声

施設利用者からは「このような機会をつくってくれて、ありがとう」「草花の名前を知ることができた」「散歩が好きになった」、施設職員からは「ハサミなどを予想以上に使いこなしていた」「一緒に作業することで、コミュニケーションが図られた」などの感想を得た。また、実施後、自発的に森林を訪れる人も増えた。

□注意すべき点

森林内では、ウルシ類やハチなどの危険要因について事前に周知すること、利用者の身体能力の違いにより作業スピードに差が生じること、指導する職員にも車イスの操作方法など基礎知識の習得が必要と考えられることなど。

木育フェスタinニセウの森



木育マイスター9名が集まり、子どもからおとなまで誰もが「木」や「森」とふれあえるように、もりのようちえん、ツリーイング、クラフト、ドラムサークル、森のお手入れなど多様な「木育」体験プログラムを実施しました。

日時 平成27年6月28日
 場所 東川町キトウシ森林公園家族旅行村
 主催 NPO法人ねおす
 共催 認定NPO法人日本NPOセンター
 NPO法人大雪山自然学校
 株式会社東川振興公社
 ニセウの森づくり運営委員会

企画 木村恵巳(1期) NPO法人大雪山自然学校
 大石拓人(2期) 大石ネイチャーコーディネーター
 講師 長多邦裕(4期) 当麻町役場(当時)
 兒玉泰治(2期) 札幌ばんけい(株)
 山田弥延(3期) Ducksoup
 大和正枝(1期) 保育士
 菅野明人(5期) 養護学校教諭
 前田あやの(5期) (株)北海道ポットラック
 大坪良子(5期)



企業による木育の取組



当別町

ツルハ・P&Gによる道民の森「水源の森」における木育バスツアーは2回目の開催。植樹と木工の両方を体験することで、森から材への流れが理解できるように工夫されています。



ツルハ・P&G木育バスツアー

日時 平成27年9月12日
 場所 道民の森神居尻地区
 主催 ツルハ・P&G
 企画運営 ヤラカス館
 札幌まるやま自然学校(高野克也(2期))
 木村恵巳(1期)、菊地三奈(2期)、
 富澤祐二(5期)、浜舘三裕姫(5期)

木育教室、クラフト体験(おがこアート、寄せ木のキーホルダーづくり)、植樹体験

プログラム事例5「木育ツアーの実施」参考事例

出典：木育事例集6「さわっていると、森にいるような気がする」より

北見の環境を学ぶエコスクール「木育でうまれる生きている喜び」



- 日時 平成27年3月22日
- 場所 オホーツク木のプラザ（北見市）
- 主催 エコスクール運営委員会
(事務局：北見市市民環境部)
- 実施 木育マイスター 島田幸季、羽根石晃彦

基調講演「福祉・医療現場における木育が生み出す効果」、ワークショップ「森林のカタリバ」で構成された、福祉と木育のコラボイベント。講演では、体を思うように動かすことができなくなった高齢者に対して木育活動を行う事例紹介とプログラムの体験。ワークショップでは、身の回りにある木のモノとその効果をグループワークで共有しました。



▲ワークショップ「森のカタリバ」



▲森林の役割を考えるグループワーク

私たちが実施しました

福祉・医療界と木育をつなげる架け橋になりたいと思います。
 <お問い合わせ先>
 木育マイスター 島田幸季
 pecho@cameo.plala.or.jp



島田 幸季
介護福祉士

自然体験を通して「感じるこころを育む」活動をしています。例えば、森の中の生まれたての川を見る活動。子どもから大人まで、野外調査のノウハウを生かした活動をしています。
 <お問い合わせ先>
 NPO法人常呂川自然学校
 代表 羽根石 晃彦 (木育マイスター)
 hane1963@see.plala.or.jp



羽根石 晃彦



事例紹介

プログラム事例6 「出前シルバー森林浴」 参考事例

出典：木育事例集5「北海道の木育案内」より

釧路市

北海道アクティビティ・ケア・フォーラム
 ～自然と触れ合う木育で回想アクティビティ

日時 平成28年1月23日
 場所 釧路ロイヤルイン
 主催 高齢者アクティビティ開発センター
 講師 島田幸季(5期) 介護福祉士

実践発表、ネイチャーゲーム

ネイチャーゲームや、木のぬくもりを活かした手工芸など、木育アクティビティを实践。「自然」をキーワードに、誰もが体験している記憶を引き出すことによって、利用者との心の交流を目指すアクティビティ活動について報告しました。

島田幸季さん
 福祉・医療界と木育をつなげる架け橋になりたいと思います。(北見市)

プログラム事例6 「出前シルバー森林浴」 参考事例

出典：木育事例集6「さわっていると、森にいるような気がする」